爲櫻の風

発行所
茨城県立下妻第一高等学校
新聞部
発行人　羽田　陽一
編集人　榧場　亮太
塚越　普
監　修　大平　賢二

紙面紹介

一面
ほぺたん食堂
コミュニティバス　他
二面
関東東北豪雨から1年
4コママンガ
桜一片　他

新たな交流の場
「ほぺたん食堂」家庭の味を子どもたちへ

食事を配膳するボランティアとそれを待つ人々

常総線下妻駅から徒歩5分。午後5時ごろ5時から7時まで「ほぺたん食堂」は開かれている。場所はコミュニティーカフェ、「プラットフォーム」の2階。子どもは100円、大人は300円という低価格で、JAや農協から無償で提供される旬の野菜や魚を使った料理が楽しめる。さらに、節分やお月見などの年中行事に合わせたメニューもあり、高校生も子ども料金で味わえる。

料理は毎回変わり、豚肉の生姜焼きや夏野菜カレーなどバラエティー豊か。開催された回数が少ないこともあるが、これまでに同じメニューは一度もない。記者が取材を行った日は、ご飯、さんまの甘酢あんかけ、キャベツと豚肉のみそ味炒め、粉吹きいも、ワンタンスープ、キャベツのみじん切り、手こね餅。たまたまその日は9月15日で、中秋の名月と呼ばれる十五夜だったこともあり、部屋にはすすきが飾られ、餅が出された。メニューを見ても分かる通り、料理の種類が多くボリュームもある。栄養バランスも良く、子どもたちにも好評だ。

「ほぺたん食堂」が開かれることになった経緯を、運営に携わる、いばらきコープ総合企画室参加とネットワーク担当課長、棚谷靖之さん（以下棚谷さん）に伺った。棚谷さんによると、もともと「ほぺたん食堂」などの子ども食堂は、貧困や親の共稼ぎ、虐待などの事情で家族一緒にご飯を食べられない子ども達に、手作りの食事や気軽に集まれる場所を提供しようと始まった。

2012年の厚生労働省の調査によると、平均的な所得の半分に満たない世帯で暮らす18歳未満の子どもの貧困率は16・3%で6人に1人が貧困状態。こうした実態を受け、NPO法人やボランティア、自治体などの運営による子ども食堂は全国に広がっている。いばらきコープは、子どもの貧困対策の推進に関する法律に基づき、茨城県が策定した計画（2016年～2020年）の趣旨に賛同し、社会福祉貢献活動の一つとして取り組んでいる。

「ほぺたん食堂」には多い時で50人以上の子ども達やその保護者が訪れる。集まった人々同士が初対面であることも少なくないが、そうした人々でも積極的に交流している様子が数多く見受けられた。5、6歳の男の子が見知らぬ同年代の男の子に近づき、挨拶を交わし、遊び友達になる。保護者同士も育児情報や近況をお互いに交換できる貴重な場となっている。このようにみんなの距離が近くなりやすいのも、「ほぺたん食堂」のアットホームな雰囲気のおかげではないだろうか。

「ほぺたん食堂」の担い手は、いばらきコープの人々や子ども達だけではない。その目的に賛同し、自主的に協力するボランティアの方たちがいる。ボランティアには大きく分けて2グループあり、いばらきコープを利用するお客さんによって結成されたコープ会と高校生、大学生による学生ボランティアだ。彼らは皆、口をそろえて「子どもたちの手助けをして、お礼を言われたり、名前を覚えてもらえたりするのがうれしい。月に一度しかない催しなので、もっとたくさんの人に来てほしい」と話していた。

また、学生ボランティアはまだまだ人手が足りず、一緒に活動する仲間を募集しているそうだ。興味ある人は、まずは食事を食べに訪れてみてはどうだろうか。

最後に、いばらきコープ代表理事理事長の鶴長義二さんに、「ほぺたん食堂」を今後どうしていきたいか尋ねると、「私たちが直接どうこうしようとは考えていない。私たちは近所の世話焼きおばさんのように、地域の皆様の間で自然に形成される手伝いをしていきたい」と話し、この新聞を読む人に向けて、「ぜひ一度、試しに来てみてほしい」と語った。

（白井）

下妻をより快適に
コミュニティバス始動

快く答えてくれた山口さん

―シモンちゃんバス」という愛称が正式に決定した下妻市コミュニティバス。デザインの募集もあり、知っている方も多いだろう。今回は下妻市役所の企画課の山口大輔さん（以下山口さん）にコミュニティバスについてお話を伺った。

来年1月に運行される予定のコミュニティバス。企画の趣旨を山口さんに尋ねると、公共交通に関するアンケートを見せてくれた。平成18年まで福祉巡回バスが下妻市で走っていた。しかし、地区によっては週に1便しかないような不便なものだったため廃止された。その後、高齢者や体が不自由な方にむけたタクシー券の助成を行っていたが、新たな交通手段の希望のアンケートの結果、コミュニティバスの要望が多かったため企画されたそうだ。

今回の運行は試験的なもので、ピアスパーク下妻から下妻駅や市役所などを通りスイチャーセンターまでの予定。6時から20時頃までの間に1時間に1便の頻度で運行する見通し。

新たな交通手段導入希望に関するアンケート結果

今後、料金を含め調整をするとのこと。

さらに導入後の予定について聞くと「今回のルートは1番需要の高いところなので、郊外にもニーズは出てくると考えられます。郊外にも目を向け、もし公共交通機関を導入するならバスがいいのか、それともワゴン車や乗合タクシーがよいのかを検討していく」と答えてくれた。

最後に、山口さんは「若者の地方流出が進んでいる。そういった人も帰って来ていただけるような街を作っていけるよう努めていきたい」と話した。下妻市では、現在建設中の「わいわいドーム下妻」や「下妻市観光交流センター」などの企画も進められている。下高生の生活に密接に関わる。下妻市の今後が楽しみだ。

（松山）

文芸部俳句甲子園出場

愛媛県松山市で開催された第19回俳句甲子園全国大会にわが校の文芸部が出場し、団体奨励賞を受賞した。初戦で強豪校相手に敗退したものの、敗者復活戦で季語「渡り鳥」を詠んだ句が評価され、団体奨励賞に選ばれた。

部長の関日奈美（2年4組）（以下関さん）に大会について伺った。大会では俳句を詠み、その俳句についてディベートする。審査員にアピールをするので、会場のお客さんの目線を気にする必要はなく、緊張しないで臨めたとのこと。次の大会に向けては、ディベート中に躊躇しないで自分の言いたいことを言うつもりだと意気込みを示してくれた。顧問の湯本先生に次回の大会までの課題を聞くと、ディベートより俳句のレベルを上げ、個性をいかに出せるかが勝負と語ってくれた。

最後に、関さんに次回の大会への目標を聞くと、今年は先輩に頼りきりだったが、今度は頼られる側になるので後輩たちをカバーしていきたい。そのためにも技量を上げていく、ときっぱり。次回の大会での活躍に期待が高まる。

大会に出場するためには最低でも5人が必要となるので、新入部員募集中とのこと。

（野本）